

平成25年  
2月20日発行

『芝地区地域情報誌』は、地域の皆さんとともに創る情報誌です。芝地区の「いい話」を紹介したり、様々な行事や活動の情報を交換したり、地域の皆さんと一緒に地域のことを考えていく場として、地域情報誌を発行しています。

## 芝地区今昔

第26号の表紙は  
**愛宕** エリアの  
話題です



# 23区の最高峰 『愛宕山』からの眺望



現在の愛宕山は  
ビルに囲まれています

標高約26mの愛宕山は23区内で最も高い自然の山です。江戸時代には遠く房総半島まで見渡せた展望の名所だったといえます。

この山頂へ至る男坂には「出世の石段」と呼ばれる急な石段があります。江戸幕府三代将軍徳川家光が山頂に咲く梅の花を馬で取りに行くよう家臣に命じたところ、ただ1人愛馬と共に石段を登り降りし見事に梅を持ち帰った曲垣平九郎が、その後、馬術の名人として家光にかわいがられて出世したという逸話に由来しているそうです。現在は86段の石段ですが、当時は丸い石を置いただけの階段が185段もあったようです。

明治初年の愛宕山上からの眺望  
(写真提供：港郷土資料館)



出世の石段から見下ろすと、  
愛宕山の標高を感じます



山頂には、桜田門外の変で井伊直弼を襲撃した水戸藩の浪士たちが成功を祈願したとされる愛宕神社や、「放送のふるさと」の愛宕山を象徴する、日本で初めてラジオの本放送が行われた東京放送局(JOAK)跡地に建つ、NHK放送博物館があります。

info  
愛宕山(愛宕神社) 愛宕1-5-3  
NHK放送博物館 愛宕2-1-1

## 芝・愛宕山の 四季おりおりを味わう。

### 御料理 さいこん 菜根

歴史的にも有名な芝・愛宕山は、江戸時代から現在まで、多くの人々から親しまれ、参拝や散策と人気のスポットです。

今回は、寒さも吹き飛ばす勢いで、愛宕山の正面右側にある「女坂」の参道を登り、老舗の中国料理店「菜根」を目指します。

「女坂」といっても急な勾配からなる石段で、なかなかきついです、

途中、豊かな緑とほのかな紅葉に囲まれつつ、登りきると、とても清々しい気分になりました。

この女坂を登った先に、愛宕山の樹木の景観に溶け込んだ木造2階建の建物が見えてきます。まるで一枚の絵のようなたたずまい、昭和34年(1959)創業の中国料理店「菜根」です。

元々は戦後の昭和24年(1949)に、現在の虎ノ門1丁目あたりに本館を構えて営業を開始、後に別館として、こちらにある愛宕山の店舗がつくられました。

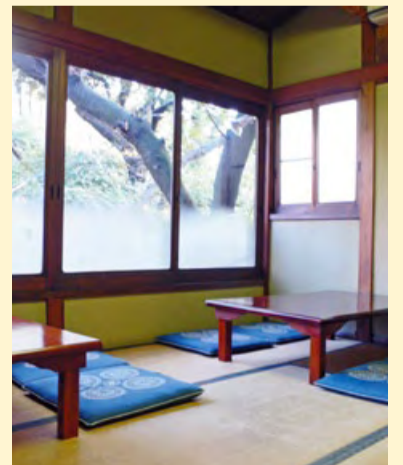
屋号の「菜根」は、中国の学者洪自誠の随筆集「菜根譚」からなるそうです。

軒先の赤いのれんをくぐり2階へと案内されると、数奇屋造を特徴とした客室「桜」「松」「梅」の3部屋



が広がります。お座敷は、大きなガラス窓から愛宕神社の境内を眺望することができる、くつろぎの空間です。八畳間、個室の「桜」の窓の外には、見事な枝ぶりの桜の木があります。菜根のご主人、新部一夫さんのお話では、「春のお花見の季節になると、桜の花で空が見えなくなるほどのピンクになります。」とのこと。やはり、シーズンの愛宕山は、大にぎわいだそうです。お座敷でゆっくりと過ごす、季節ごとの愛宕山の景色も味わい深いものになってくるのではないのでしょうか。

[文・写真 ■ 桑原 庸嘉子]



「桜」の間 窓に桜の木

壁に掛けてある額縁の写真。昭和34年 菜根(店前)にて。先代、大工棟梁、従業員と共に。当時のほっぴ姿が懐かしい



info  
御料理 菜根  
愛宕1-5-2  
TEL 03-3437-3618

# ばんねんざん せいしやうじ 萬年山 青松寺

—彫刻にみる仏たち—

青松寺は、文明8年(1476)に創建され、慶長5年(1600)に現在地に移った曹洞宗(禅宗)の名刹です。天保年間(1830-44)の「江戸名所図会」に、青松寺境内の鳥瞰図があり、伽藍後ろの愛宕山から続く眺望のよい山は含海山と呼ばれ、青松があり、平らな岩は高く分かれてつながり龍に似て、珠を抱いて眠りさらに穏やか、美しい雲が下の鐘堂にかかっていると詞書にあります。

平成13年(2001)に緑と地形を活用して青松寺の伽藍も再整備され、現在左と右の蓮の花に見立てた超高層タワーの間に山門があります。境内には、鐘楼、坐禅堂、中央に本堂、右側に観音聖堂、裏山にお墓、手前鐘楼の脇の道をたどって丘を登ると茶室智正庵があり、また境内のそここに木彫やブロンズ造りなどの仏たちが安置されています。

山門では、持国天、広目天、増長天、多聞天の心強い造形の木彫の「四天王像」が迎え、山門の軒下には「隅龍」の彫刻、境内には蓮の台から飛び出した「誕生童子」とその周りを囲む象に乗った四体の「花祭りの童子」の像があります。また、覚醒して下界に降りた裏山の龍が、胴体を崖内に残したまま、黄金の珠を挿んで頭と尾で空を切り、その口より昔の門前にあった桜川を模した水の流れを噴き出す「龍の吐水口」、含海山に飛遊した誕生童子が人間界に干支を求めて回転させて遊ぶ「摩尼車」などがあります。これらは、彫刻家・飯内佐斗司氏作品で、「飯内佐斗司の面構え良し」として先代住職が依頼したそうです。

飯内氏は、奈良や京都などにある仏像を中心にした彫刻文化財の保存修復や古典技法の研究を専攻され、平成16年(2004)から東京藝術大学大学院 文化財保存学教授として後進の指導にあたっています。また、仏像の古典技法研究を通して平安時代後期の仏師・定朝が集大成した「寄木造り」(頭体幹部を複数の角材で

組み立てる構造)や、仏像の各部を一定の率で割り出して必要な材木の寸法を決める「木割り」という製材法、さらに乾燥による割れの抑えや重量軽量化のために像の内部を空洞にする「内割り」などを学び、その他に仏像の表面仕上げの漆や岩絵具などの技法をも幅広く研究しています。

そして、その成果を応用して、現在、彫刻家として創作分野でも活躍しています。

彫刻家・飯内氏は、「生命の器」としての鏡シリーズや、エネルギーの象徴としての童子たち、彼らが生命の時間と空間を超える連続性などをキーワードとして芸術作品を制作しています。創作の原点は、少年時代、「鉄腕アトム」の時空を超えた存在と広大無辺、縦横無尽の活動に魅了されたことにあるそうです。なお、平成遷都1300年記念事業の奈良県マスコットキャラクター「せんとかん」も同氏の作品です。

日本古来の伝統技法を駆使しながら完成度の高い作品を創造し、いにしへの叡智を彫刻家として未来へとつないでいます。



山門



彫刻家・東京藝術大学大学院教授 飯内佐斗司氏

千年前の仏師が制作した仏像がわが国の大切な文化財であるように、現代彫刻家・飯内佐斗司の作品群も、私たちが身近に触れることのできる、未来に伝えるべき文化財といえるのではないのでしょうか。

青松寺には梵鐘が2つあります。今の鐘楼堂の鐘は昭和31年(1956)に鑄造されたもので、本堂脇の櫓につるされた鐘は元禄年間(1688-1704)に鑄造されたものです。元禄の鐘は第2次世界大戦中に国からの金属類供出令で供出され、すでにないものと思われていましたが、近年縁あって戻ってきたそうです。元禄と昭和の梵鐘は毎日朝と夕に交互に撞かれ、元禄の音色は今も当時のまま鳴り響いています。

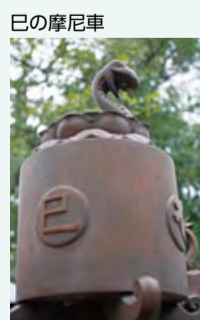
(文 ■ 森 明 / 写真 ■ 早川 由紀)

- 取材協力:  
青松寺  
東京藝術大学大学院 文化財保存学 飯内佐斗司教授  
青山美術株式会社
- 参考文献:  
「萬年山 青松寺」パンフレット  
「青松寺」ホームページ  
飯内佐斗司著「開運 楽観道の手紙」求龍堂 2002  
飯内佐斗司講演「作品の源泉と技法」1999  
在仏日本大使館 広報文化センター 記念講演会  
飯内佐斗司著「日本彫刻史概説」p189 年報2011  
東京藝術大学保存修復彫刻研究室  
「萬年山青松寺プロジェクト」ホームページ  
市古夏生・鈴木健一校訂「新訂 江戸名所図会1」p264  
筑摩書房 1990  
「森ビル 建築から都市へ」新建築第87巻10号 p106 新建築社

info 萬年山 青松寺  
愛宕2-4-7  
TEL 03-3431-3087



崖を足でける龍



巳の摩尼車



誕生童子・花祭りの童子と東京タワー



木彫の持国天

## 虎ノ門1丁目に長年お住まいの上野富美子さんに聞く

歴史と文化に包まれた虎ノ門地域。ここには、日本の歴史の舞台となった数々の場所があります。

江戸幕府260年を支えた「江戸城外堀の石垣」(千代田区霞が関3丁目)を始め、明治期の人材育成を果たした「工部大学校跡」(千代田区霞が関3丁目)、明治の暮らしを映す鏡として「読売新聞」を刊行した日就社(読売新聞の前身)があった「新聞創刊の地」(虎ノ門1丁目)等です。

この地に長年お住まいの上野富美子さんからお話を伺いました。

### 1 家業のこと

富美子さんのご実家は、戦前は旅館業を営んでいました。「高等旅館・朝陽館」という旅館名で、付近に国会議事堂や官庁があるため様々な人々が利用していたそうです。



写真には「東京市芝区琴平町二番地 高等旅館 朝陽館」と書かれています(関東大震災以前の写真)

お持ちくださったアルバムの中に、旅館を背景に「全日本都市対抗野球大会・東京野球倶楽部宿舎」という立て看板とともに人々を写した記念写真がありました。



昭和初期、社会人野球チーム「東京倶楽部」の宿舎にもなっていました

今も続く社会人野球の大会である都市対抗野球大会は、昭和2年(1927)にその第1回が開催され、東京倶楽部も同じ年に結成されました(※参照)。富美子さんが「この人が、小西得郎さんですよ」と、写真の中の人物を指して示してくれました。往年の名野球解説者です。「何と申しましょうか」という独特な言い回しが、流行語となりました。

戦後は「コーヒー店」を営んでいたとのこと。千代田区内幸町にNHKの放送会館があった関係で、その職員の人々がよく利用していました。支払いのツケで、店が用意したノートに「利用者・利用日・注文品」を書き込んでもらっていました。「信頼関係ですね。楽しい思い出です」と富美子さん。

※昭和13年(1938)解散

### 2 家族のこと

富美子さんは、日本の伝統芸能の「日本舞踊」の稽古を「6歳の6月6日」に始めたそうです。芸の上達を願って6歳の6月6日に稽古事を始めるという、日本の古くからの習慣に従ったのですね。お母様は「長唄」を習っており、共に日本の芸の道に進んだとのこと。お母様は、大正時代に愛宕山にあった東京放送局(現在のNHK)のスタジオで、長唄の演奏を行ったそうです。その様子を写した写真が、アルバムにありました。

(文 ■ 清田 和美)



戦後は「コーヒー店」を営んでいました

### 3 子どもの頃の遊び

虎ノ門地域は、遊ぶ場所には事欠きませんでした。日比谷公園や金刀比羅神社の境内、虎ノ門公園(通称三角公園/千代田区霞が関3丁目)等で遊んだそうです。この公園地域は、ブランコや滑り台・砂場等があり、友達と日が暮れるまで遊んだことが「昨日のこと」に感じられます」と富美子さんは話されました。

虎ノ門地域をこよなく愛し、長年にわたって住み続けている富美子さんは、ゆったりとした語り口で、言葉を選びながら丁寧に、お話をしてくださいました。虎ノ門地域の素晴らしさを改めて感じる事ができました。



東京放送局のスタジオにて。お母様は前列左から2番目の方です(大正時代)

# モザンビーク共和国大使館

## 訪問記

### 平和を取り戻し、経済成長を続ける国

今回のモザンビーク共和国大使館訪問では、ベルミロ・ジョゼ・マラテ駐日大使にモザンビークの歴史や日本との交流についてお話しいただきました。



とても紳士的な  
ベルミロ・ジョゼ・マラテ駐日大使

#### モザンビークってどんな国?

モザンビーク共和国は、アフリカ大陸の南東、インド洋に面し、海を挟んだ向かい側にマダガスカル島があります。長い海岸線は全長2,700kmもあり、美しい海と豊富な海産物に恵まれ、近年、観光地としても注目されています。国立公園として保護された地域にはライオンやキリン、象といった野生動物が生息しています。



ヨーロッパからの観光客が多いビーチリゾート(モザンビーク共和国大使館)

歴史をさかのぼると、1世紀頃にはバントゥー系アフリカ人(現在でもモザンビーク人の多くを占める)がモザンビークの地で生活をはじめました。その後ポルトガル領となり、400年近い植民地支配の後1975年(昭和50)に独立し、16年間の内戦を経て1992年(平成4)に平和を取り戻すと、経済的に大きな発展をとげるようになりました。

#### どんな民族と文化なの?

「モザンビーク人は明るく、ダンスが好きで、昔からの知り合いのように親しみやすい国民性です」と大使はおっしゃっていました。いくつもの民族があり、言語も公用語はポルトガル語です



伝統楽器ティンビラはオーケストラのような演奏が魅力(えひめグローバルネットワーク)



自然史博物館(モザンビーク共和国大使館)

が、マクアやツォンガなどのバントゥー諸語などが使われ、それぞれの民族の文化や言語が継承されています。歴史的な建造物も多く、16世紀に建てられたモザンビーク島のノサ・セニョラ・デ・バルアルテ礼拝堂は南半球に現存する最古のヨーロッパ建築として知られています。またモザンビーク島は世界遺産に指定されており、本土から3kmもある橋がかけられています。日本からは1586年(天正14)にローマ教皇に謁見するために派遣された天正遣欧少年使節一行がヨーロッパから船で日本に戻る際、悪天候のため一時モザンビーク島に滞在していた記録が残っています。

#### 平和を望みつづけた末に

1975年にポルトガルから独立したとき、大使は18歳でした。人々は「自分たちの国をつくる、差別のない世の中をつくること」を目指し努力しました。

しかし、独立後すぐに内戦に突入してしまいました。大使も父親が仕事をしているシカラクラという町で空爆にあい、急いで首都マプトに逃げたそうです。道路や畑などあらゆる物が破壊され、何も生産できない貧困の中で「平和を取り戻すんだ」と願ひ続け、やっとそれが実現しました。その教訓からモザンビークでは教育に力を入れ「平和を守る戦いはつづいている」と子どもたちに教えているそうです。

#### 日本との関わり

エビやアルミニウム合金、石炭などを日本に輸出しているほか、最近では液化天然ガス(LNG)の開発事業に日本の企業も参加しています。東日本大震災後、「エネルギーの安定供給」は、私たち日本人にとって大きな課題です。モザンビークには世界最大規模のガス田が発見され、その開発が進行中です。

実際の供給は2018年(平成30)以降になります。モザンビークと日本の関係は、エネルギー供給面でも強く結ばれることでしょう。

(文 ■ 作田 宗子)

### 大使から芝地区へのメッセージ

「私は駐日大使に任命されたことをとても誇りに思っています。日本や特に芝地区の皆さんにはホスピタリティを持って受け入れていただき、感謝しています。モザンビークと日本の関係がさらに友好に発展していくには、人と人の草の根の交流を通してお互いが理解しあうことが大切です。モザンビークのことをもっと日本の皆さんに知っていただきたいと思います。」

**info** モザンビーク共和国大使館  
三田3-12-17 芝第三アムステルダムビル6F  
TEL 03-5419-0973  
● e-mail : moz.tokyo@embamoc.jp

#### イベントのお知らせ

##### ① 第6回 アフリカンフェスティバルよこはま2013

日時 4月5日(金)~7日(日) 午前11時~午後7時(最終日は午後5時まで)  
会場 横浜赤レンガ倉庫1号館(神奈川県横浜市中区新港1-1-1)  
主催 アフリカンフェスティバルよこはま実行委員会

##### ② チャリティー・ディナー・ダンス

日時 4月19日(金) (受付)午後6時/開宴 午後7時~10時  
会場 ホテル椿山荘東京(文京区関口2-10-8)  
主催 駐日アフリカ大使夫人の会

※チケット制です。収益金は東日本大震災の被災地のために活動するNPO、アフリカの恵まれない子どもたちのために活動する慈善団体に寄付します。

①、②とも詳しくはモザンビーク共和国大使館にお問い合わせください。

# オランダ王国大使公邸

## 訪問記

### 特別一般公開日がある大使公邸をご存じですか?



オランダ王国大使公邸外観(現在)



地下鉄日比谷線神谷町駅付近のビジネス街から東京タワー方向に通りを入ると、雰囲気が一変。緑に囲まれた広大な敷地の中に、オランダ王国大使公邸があります。オランダ王国大使館 報道・文化部 報道・文化補佐官のバス・ヴァルクスさんに、大使公邸を案内していただきました。

今回案内していただいた  
バス・ヴァルクス報道・文化補佐官

#### 芝公園の地に130年

オランダ大使館/大使公邸は、安政6年(1859)に芝の西應寺を公使館として開設されました。その後、明治16年(1883)に日本政府から借地して、現在の芝公園3丁目へ移転しました。

当時の建物は木造だったため、大正12年(1923)の関東大震災で焼失してしまいましたが、昭和3年(1928)に再建。ジェームズ・M・ガーディナーの設計による、鉄筋コンクリートと銅板葺きの屋根の重厚な建物は、太平洋戦争時の空襲でも焼失を逃れることができた。

建築されてから85年がたちましたが、東日本大震災後に建物を検査したところ、ヒビひとつなく無事だったとのこと。本当に驚きです。

#### 左右対称、調和の取れた美しい建物

大使公邸は、庭園に面して建てており、正面玄関から入ると手前左手にレセプションルーム、右手に書斎があり、出窓が左右対称に配されているのが特徴です。



昭和3年、再建当時の写真(左:庭園から公邸を望む/右:ダイニング)  
(清水建設株式会社所蔵の写真より)

中の部屋も、ダイニングルームなどが左右対称なこと気づきます。どの部屋も大きな窓から陽が降り注いで、規則性を保ちながらも優雅な雰囲気です。美しいシャンデリアや、階段の踊り場にあるステンドグラス、2階のバルコニーからの庭園の眺めも印象的でした。

#### 年に2回、春と秋に見学ができます

オランダに興味と親しみを持ってもらえるようにと見学者に開放したのが一般公開の始まりで、今春は4月12日(金)・13日(土)に、秋は11月3日の文化の日(土)に庭園と建物の外観を無料で見学できます。春は庭園に咲き誇るチューリップも見どころのひとつです。

「最初は緊張した面持ちの見学者の皆さんが、帰る時は楽しそうな顔になっているのを見ると、とてもうれしいです」と、ヴァルクスさん。大使公邸を一般向けに公開している国は他にないそうで、新しい開かれた試みですね。

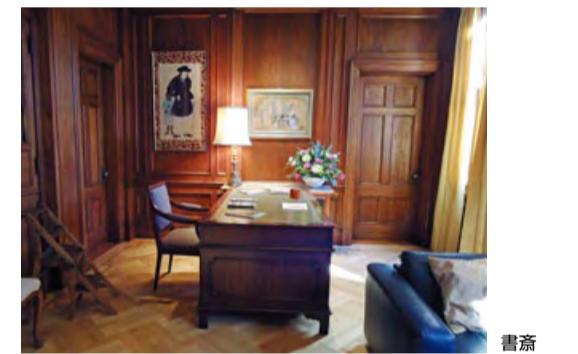
※4月:庭園のみ公開。11月:大使公邸内に主に公開。庭園も見学できます。

#### 両国の友好をさらに深めるために

日本とオランダの通商関係は400年以上続いており、古くからの友好的な関係は、多くの人の知るところです。日蘭の交流の証は全国各地に残されていて、その史跡や施設を紹介するWebサイト、「日蘭友好スポットガイド(<http://www.nihonoranda.com>)」が昨年9月に開設



白色を基調としたサロン



書斎

されました。写真や解説を楽しみながら、日本とオランダにゆかりのある場所を知ることができます。また今年、本国では、オランダ出身の画家ゴッホ生誕160周年とゴッホ美術館創設40周年にあたるほか、アムステルダム国立美術館が改修を経て新しくオープンするなど、「アムステルダム2013」と呼ばれる周年行事やその他様々なイベントが予定されています。産業だけでなく、文化・芸術面でも魅力あふれる国ですね。

そんなオランダ王国の大使公邸へ、この春出掛けてみませんか。1万本の満開のチューリップが、出迎えてくれることでしょう。(文 ■ 藤原 敦子)

**info** オランダ王国大使公邸  
芝公園3-6-3  
TEL 03-5776-5400

## 江戸時代の空気を感じる…

### 〈松蓮社の弁天洞〉



弁天洞入り口

松蓮社は、江戸時代に51寺院あったと言われる、浄土宗大本山増上寺の子院のひとつです。江戸幕府三代将軍徳川家光(1604-1651)の長女で、元禄11年(1698)に死去した千代姫(1637-1698)の位牌殿として、尾張徳川家により同年建立されたと伝えられています。

松蓮社の弁天洞は、敷地内西側の崖地の下部にあります。この洞穴は松蓮社の建立の頃から存在したと伝えられています。一般公開日は、毎月1日・17日。見学をする際には、東京メトロ神谷町駅に向かう通りに面した入り口から入ります。

洞の入り口は高さ1.4mほど。崖地の上には港区の保護樹林が広がっていますが、さらに見上げると、周辺には近代的なオフィスビルが数多くあります。都会の建築物と江戸時代の洞穴。とても不思議なコラボレーションです。

洞内には懐中電灯を持って入ります(懐中電灯は見学者のために弁天洞の入り口に用意されています)。中は意外に暖かく、湿気があります。洞内は高さ1.7m前後、幅は1.0m前後。入り口から2mほど入ったところに、石造りで半浮き彫りの地藏菩薩立像が安置されています。洞穴はそこですぐに左に曲



がります。そこから先は真っ暗です。通りを行き交う自動車のエンジン音すら聞こえなくなり、まるで別世界に入り込んだかのような。前に進むには、洞穴の壁に等間隔に配置されたロウソクの灯りと懐中電灯の光が頼りです。

洞内を進みながら天井や壁を照らしてみると、おそろしく手彫りによるものと思われる、ノミの跡が見られます。また、ところどころに文字も確認できます。さらに洞内を蛇行しながら進んで行くと、2カ所の側道がありました。この側道は現在は塞がれており、安全管理のために通行禁止となっていますが、太平洋戦争当時、弁天洞が防空壕として利用されていたときに、抜け道として掘られたものです。

そして、洞穴のいちばん奥には石の祠があり、その中に弁才天像が安置されています。弁才天像は、石造り

の半浮き彫りで八臂(8本の腕を持つ)の座像です。それぞれの手には鞆索(投げ縄)、長弁、輪宝のほか、弓、箭(矢)、斧、刀、戟(矛)等の武器を持ち、やや面長のすっきりとした顔立ちをしています。

また石の祠の右側面に銘文が刻まれており、正確な意味は明らかにされていませんが、この祠が造立された時代を示すものと言われています。松蓮社の住職である樹下隆之助さんのお話によると、弁天洞や地藏菩薩立像、弁才天座像について、年代を決定できる資料はなく、詳しい調査等も行っていないため、正確な制作時期はわからないとのことでした。

多くの謎に包まれた松蓮社の弁天洞。江戸時代の空気を感じながら、さまざまな想像力がかき立てられます。(文・写真 ■ 菊池 弓可)



洞内の壁に見られる文字の一部

●参考文献:「港区の文化財 第3集 増上寺とその周辺」港区教育委員会編

**info** 松蓮社  
芝公園3-1-6  
TEL 03-3431-0474



